

# バンドリ！の軌跡

たこどら

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

どういうわけかバンドリ！世界に転移し、これまたどういうわけかCIRCLEで働くことになつた閔主人公「リン・シユバルツァ」とガールズバンドが送る日常？コメディ

## 目 次

激動の日々の始まり	
いざ、スカウトへ	Poppin' Party! 編
前途多難のはじまり	
次のバンドは?	
高貴なる青薔薇たち	
約束の夕影	
	18 14 11 8 4 1

## 激動の日々の始まり

目を覚ますと見慣れた寮の部屋ではないが、今となつては見慣れた風景である自分の部屋で目を覚ます。

「もう、3ヶ月か……。」

俺、『リン・シュバルツァー』は呟いた。

俺は今、リーブスでもゼムリア大陸の何処かにいると言ふわけではない。

どういうわけか、俺は今日日本の東京という場所にいる。

「ようやく、ここでの生活にも慣れてきたな。」

ここ、東京の文明レベルはゼムリア大陸とは比べものにならないぐらい進んでいる。

だが、文明が進んでている代わりにオーブメントの様の様に超常の現象を起こせる様なものはほぼ皆無だ。

「これもそれも“まりな”さんのおかげだな。」

まりなさんこと、『月島まりな』は今の俺の職場『CiRCLE』の上司に当たる人だが正直上司というより気のいい友達、級友みたいなものだ。

「つと、今日はシフトが入つていたな。」

そんな事を考えていたら出勤時間近くになつていた。

俺は、手早く準備を済ませCiRCLEへ向け家を出た。

↓CiRCLE↓

「おはようございます。」

「おつ、今日もはやいねえ。」

「いや、はやくはないでしよう……？」

CiRCLEに着き、挨拶をするといつもの“とくまりなさんがい

た。

確かに、時間の10分前に来てはいるけども…。  
まりなさんは、誰よりも早く来て仕事をしているから頭が下がる。  
この感じ、トワ先輩を思い出すな。

「まりなさん。

いつも言つてますけどちゃんと休んでるんですか？

それに、俺に出来る事だつたら言つてください。手伝いますから。  
そう、まりなさんは基本的にひとりで仕事をこなそうとする。俺が  
知る限りでは…………だけど。

「うん?

心配してくれてるの?おねーさん嬉しいなあ。」

・・・前言撤回この軽い感じはトワ先輩ではない。どちらかと言  
うとこれはあの悪友だ。

「はあつ、そりやあ心配しますよ。」

・・・知り合いが倒れたら誰でも心配するのが普通だと思う。  
「つ・・・ありがとー、リン君。

それじゃあ早速で悪いんだけど一つ頼まれてくれないかな?」

何故か普通のことを言つたのにまりなさんの顔が少し赤くなつた  
様な気がする。

風邪かな?そう思つた俺はお互いのおでこをくつつけた。

「ふえつ!」

うん、やつぱり熱があるな。37度位か?

「やつぱり、熱あるじゃないですか!」

仕事は俺に任せて今日は休んでてください。」

「だつ大丈夫、大丈夫!」

作業してて体が温まつてるだけだから!」

「え?いやでも。」

「ほんとーに、だいじょうぶだから。」

「うーんまあ、まりなさんがそう言うなら…。

それで、俺に頼みたい仕事つて?」

本人が大丈夫と言つているんだし問題ないだろうが気にかけてお

こう。

「つと、そろそろ今度やるイベントのことですね。」

「イベント？」

「あれ? 言つてなかつたつけ?」

今度ここでライブイベントやるんだよ。」

初耳だ。まりなさん仕事はしつかりやるのに何故かこう言う大事なことは伝え忘れることが多い。

「はあ……

それで、そのライブに向けてなにをやればいいんですか?」

「出演するバンドをスカウトしに行つて来て欲しいの♪」

「・・・・・・・・・・へ?」

# いざ、スカウトへ S P o p p i n , P a r t y !

編

「へつ？」

まりなさんから出てきた言葉に思わず変な声が出てしまう。

(今、なんて言つた？)

バンドのスカウト？

機材の準備じやなく？)

念の為、まりなさんに確認をしてみる。

「あの、まりなさん。」

「うん？」

「聞き間違えじやないといいんですけど

出演するバンドをスカウトして来て欲しいって言いましたか？

機材の準備とかではなく？」

「残念ながら聞き間違えじやないよ。」

「( 。 ) .....」

流石に2回も聞いて聞き間違えるなんて事はなかつたがあまりのことに口が塞がらなくつてしまつた。

それもそうだ。まだC i R C L E に来て3ヶ月しか経つてしないリインに頼む様な事ではないだろう。

それに詳しくはないがライブハウスでイベントをやる事が決まつたらバンドマン達の方から参加を申し込んで来る物だと思つてゐる。

「えつと……」

イベントの告知とかはやつてゐるんですね？」

「そりゃあ、もちろんやつてるよ。」

「それだつたら、出演するバンドはいるんじやないですか？」

至極当然のことを言つたら予想していなかつた言葉が出てきた。

「ああ、バンドと言つても『ガールズバンド』限定だからねえ。なかなか集まらないんだよ。」

いま、なんて言つた？

“ガールズバンド”限定？ガールズバンドってたしか、女の子だけで構成されたバンドだよな。

そのスカウトに行つて欲しいというのも驚いているがそれ以上に

…。それなら同じ女性のまりなさんか行つた方がいいと思ふんですけど

それに俺、カルスバンドのことは全くわかりませんよ?」

でも、ガールズバンドのことに関しては問題ないよ！こつちで

程度目星はつけてるから。

まあ確かに、準備に忙しい中出演するバンドをスカウトしに行つて

それに、出演して欲しいバンドに目星がついているのならいくらか探しもある。

そういう風にリインは了承をしようとしたが

もの凄い勢いでひとりの女の子がCIRCLEの入り口から入つてきて挨拶をして来た。

「「、「んにちわ………」」

「戸山香澄！ ですっ！ はじめまして！」

達が入ってきた。

「はー… やーと追いついた… まつたく、ちよつとは人の言うことを聞けつての！」

どうやらあとから来た彼女達は香澄ちゃんを追いかけてきた様だ。  
「あ、あははー!す、す、ません、急ごう邪魔して。

すぐ帰りますから。」

「いや・・・えっと香澄ちゃん、だつけ？」

背中にしょつているのはギター?」

気になつていたことを香澄ちゃんと聞いてみた。

「はいっ! 私、ここにいるみんなと

『Poppin' Party』っていうバンドをやつてるんです!」

「へえ、あなた達がそうなんだ!」

どうやら、まりなさんは彼女達のバンドを知つてゐる様だ。

それとも、ライブハウスで働いてゐるのに俺が知らなすぎるのだろうか?

「練習帰りにこのライブハウスを見つけて突撃してみましたっ!」

「……というか、私達自己紹介した方がいいんじゃないかな?」

「少女達自己紹介中」

髪の毛をシユシユ?で纏めている子が

「山吹沙綾」でドラム。

メンバーの中で一番背が高い子が

「花園たえ」でリードギター。

金髪ツインテールで息も絶え絶えだった子は

「市ヶ谷有咲」でキーボード。

黒髪ショートの子は

「牛込りみ」でベース。

そして、

「ほら、香澄ももう一回ちゃんと挨拶しろっ!」

「はいっ! 改めて、私は戸山香澄、ギターでボーカルですっ。

キラキラ、ドキドキしたって思つてた時に、

このランダムスターに出会つて……

「みんなとバンドを組むことになりましたっ。

バンドは毎日たのしいです!」

「うん、高校生はやっぱり元氣があつていいね。私は月島まりな。まりな、とかまりなさんって呼んでもらえるとうれしいな。このライブハウスのスタッフをしているの。」

「ほら、君も自己紹介! よろしくね!」

「俺は、リン・シユバルツァー。」

まりなさん同様、こここのスタッフだ。よろしくな。

—

## 前途多難のはじまり

「リイン・シュバルツァーだ。よろしくな。」

「リインさんっ！よろしくおねがいしまーすっ！」

そう彼女達、P o p p i n , P a r t yと挨拶を交わすと、

「まさかここでP o p p i n , P a r t yのメンバーに会えるとはね。

これはラッキーだね～。」

まりなさなんが何か言っている。ラッキー？

「えっと？何がですか、まりなさん？」

「何が？つて、もうライブだよライブ！

この子達に、うちのイベントに出てもらうの

それにこの子達が私が目星をつけていたバンドの1つだしね。」

急に何を言い出すかと思えば始めて会った子達にイベントの参加を促すみたいだ。

しかもさつきスカウトの件を了承したからイベント参加を促すのは俺の役目だ。

それにして、日星の1つということはそれなりに人気があるのだろう。

「ほらほら、早速君から声、かけてみてよ！」

「はあ～……、わかりましたよ。

えっと……、いきなりで悪いんだがライブイベントに出る気はないか？」

「ライブイベント？

なになに!?出たいですっ！」

もの凄い勢いで香澄ちゃんが食いついてきた。まだ何も説明すらしていないのに。

「香澄、早まりすぎ。

もつと詳しく聞いてみないとわかんないでしょ。」

「・・・・つて事で、今の話、

もうちょっと詳しく聞かせてもらえますか？」

（リイン説明中）

「なるほどなるほど！つまり…………？」

「私達にこのライブハウスでやるイベントに参加してほしいってこと！」

つか、わかれよ！」

「あはは・・・・」

有咲ちゃんの的確なツッコミに思わず俺とりみちゃんの口から苦笑が零れた。

「ライブイベント、かあ…………つ！わかりましたっ！」

私達まだまだ初心者だけど、がんばります！」

「安請け合いしすぎだろ・・・・つ！」

イベント参加を促したこちらからしてもそんな簡単に決めていいのかと不安になってしまった。

「えー、だつて楽しそうだし。」

「…………ま、こうなつたら香澄は聞かないからね。出るしかないっ！」

…………どうやら香澄ちゃんが出ると言つた時点で決まつていた様だ。

「ありがとう！助かるよ！

ライブの練習には、うちの併設スタジオを使ってくれていいからね。」

「えつーこつてスタジオもあるんですかっ！すゞーい！！

「ありがとうございまーすっ！」

「…………なんか、早速弾きたくなつてきた。

練習、していこうよ。」

「さんせーいつ！まりなさん、リインさん、早速スタジオ借りてもいいですかっ？」

「（ああつ）もちろん！」

「わあつ、やつたー！ありがとうございます！」

りみりん、さーや、有咲も！さつそく練習していこうよー！レッツ

「ゴー！」

（これで、1バンドの出演が決まった訳か……）

まりなさんの目星があといくつあるのか分からぬが非常に大変なことを引き受けてしまったと思うリインである。

次のバンドは？

「……で、つまり、出演者が私たち以外決まっていない、と。」

「恥ずかしながら…………」

「あ、あはは（…………それで、良ければ他のバンドのスカウトを手伝つてくれないかなー、なんて…」

私はここを離れるわけにはいかなくつて…………」

事情を説明したら、有咲に呆れられた。

それもそうだ。出演するバンドが自分たちしかいないなんて聞いたら誰もが呆れ果ててしまう。

あと、スカウトの話とは関係ないがポピパメンバーの呼び方だがみんなちやん付けで呼んでいたら

『こ、この年で男の人にちやん付けで呼ばれんの恥ずかしいから呼び捨てで呼んでくれよ』

と有咲の要望で呼び捨てになつてている。

ちなみにその時の有咲の顔が異様に赤かつた。恥ずかしいと言つてるから相当恥ずかしかつたのだろう。

「バンドの目処はついてるんですか？」

「つと、そうですよまりなさん。

目処がついてるとは聞いていましたけど後何バンドいるんですけど？」

？」

沙綾の言葉に聞きそびれていたことを思い出す。

スカウトの件を了承したはいいもののバンド名も何も知らなければスカウトのしようもない。

「えつとね、ぜんぶで4バンドいるんだけど…………」

最近私が注目している高校生バンドなの。」

「バンド紹介中！」

„Afterglow“

中学校の幼馴染で結成されたバンド。荒削りながらパワフルな演奏とボーカルが人気。

## "Pastel\*Palletees"

芸能事務所所属のアイドルバンド。メンバー全員、しつかり演奏ができるらしい。

「ハロー、ハッピーワールド！」

ボーカルの『世界中を笑顔にしたい！』との思いで結成されたバンド。

“R o s e l i a”

実力派でボーカル、演奏がプロ級のバンド。音楽業界で一番注目されている。

「へえ、どのバンドも個性が違うそうで、おもしろそうですね」「そうなの！」

このイベントはね、たくさんの個性をもつたバンドが集う、パーティみたいにしたいなって思ってるんだよね。」

「それで……、そのパーティを成功させるために、みんなには早速R o s e l i aのスカウトに行つてほしいんだけど……」

いきなり実力派揃いのバンドをスカウトに行くのか…………。

まあたしかに、そのR o s e l i aがいればイベントは成功するだらうし確保しておきたいのだろう。

「もつちろん、てつだいますよっ！」

「はあっ!? ちよ、勝手に……！」

「楽しそう。私、いろんなバンドに会つてみたい

「だよねだよね！」

有咲の抗議を無視して話を進めて行く香澄、たえ、まりなさん。かく言う俺も、あつさりと了承された事に驚きついて行けてない。

・・・まあ、ほぼ香澄の独断だが。

「ただ…彼女たちすつぐくストイックで真面目らしくて…

自分たちが納得できるステージじゃないと出演しないみたいなの……R o s e l i aを出演させるの実質無理な気がする

「まりなさん！ 何事もチャレンジですよっ！」

お願ひしてみなきやわからないですから！おたえ、一緒に声かけに行つてみよう！」

言うや否や駆け出して行く二人。

そもそもどこにいるかわからないのにどうやって声を掛けるつもりだ？

「あつ、ふたりとも……！」

リイン君も、一緒に行つてきて！」

「えつ!? あてもないのにどうやつて？」

「彼女たち、さつきこの辺りで見かけたの。

まだ遠くにいってないはずだから、走つて走つて！」

「そう『言う』ことは早く言つてください！」

とりあえず、先に行つてしまつたふたりに合流するため俺は走り出した。

「ハア……つたく、大丈夫かよ」

## 高貴なる青薔薇たち

俺は、飛び出していつた香澄とたえを追つてCIRCLEの外に出た。

「R o s e l i a、R o s e l i a♪♪

ん～・・・どつかで聞いた名前だなあ

・・・ああっ、おもいだした!!

グリグリとジョイントライブしてた人たちだよねっ!!?」

どうやら香澄、ポピパはR o s e l i aを知っているようだ。

それにも、名前を聞いたら普通はすぐに気づくものじやないか?

「もしかして香澄、気づいていなかつたの?」

……この感じからして、多分香澄だけが気づいていなかつたな。

「え、えへへ・・・

あ、り、リインさんも、一緒に来てくれんですか?

ありがとうございまーす!」

「そりゃ、そうだよ。

君たちに手伝つてもらうのに俺が何もしない訳にはいかないだろう?

・・・つと、まりなさんが言うにはR o s e l i aを近くで見たら

しいからすぐを探そうか

そう言い辺りを見回すが、そもそも俺はR o s e l i aのメンバーを誰一人として知らないから見つけようがない事に気付いた。  
(仕方ない。こ<sub>レ</sub>はふたりに任せるしかないか)

そう思い、声を掛けようとしたら

「香澄、見て!

あそこにあるの、R o s e l i aの人たちだよ」

「あっ、ホントだつ。声かけてみようつ!」

ちようどR o s e l i aを見つけたようだ。

それに、向こうもこちらに気付いたようでメンバーのひとりが声をかけてきた。

「戸山さん、花園さん、こんなところで何をしているの？」

「ひ、氷川先輩っ！せ、せせせ先日はどーもっ！」

今日はちょっと、R o s e l i aの皆さんに用がありまして・・・ふむ、どうやら、氷川、とよばれた彼女とふたりは学校の先輩後輩みたいだな。

とそこにもうひとり声をかけてきた。

「そつか。この子達花女生なんだつたね。

つてことは、紗夜の後輩ちゃん？紹介してよ～」

「1年後輩の戸山香澄さんと花園たえさんよ」

「どうも」

「アタシはリサ。ベースやつてるんだ。

こっちの友希那がボーカルで、この子がドラムのあこ。

それから、キーボードの燐子。あらためて、よろしくね☆

「よろしくお願ひしまーすつ！」

すごいな。流れるように自己紹介とメンバーの紹介を……リサのコミュニケーション力に感心していると、友希那と言われた少女が本題をふつってきた。

「それで、私たちに何の用かしら？」

私たち、これからスタジオにいくのだけど

「は、はいっ！あの、お時間はあまりとらせませんからっ！」

「詳しいことは・・・この人から」

まるつと、投げ出されたが関係者なのだから俺が話をしなければ不誠実だろう。

というより、それまで盗られたら何のために来たのかわからない。

（リイン、説明中）

「ライブイベント？たのしそーつ！」

「いいねいいねーつ！」

「いろんな方がたくさん・・・でるんですね・・・ひどが・・・たくさん・・・こわい・・・」

「わあっ、りんりん、落ち着いて～！」

あこはイベントに好印象のようだが燐子の方は難色……  
と言うよりかは人前に出るのが苦手という感じだな。

「……まだ出ると決まつたわけではないわよ」

「そうね。イベント自体に興味がないわけではないけれど、  
私たちのレベルや、目指すものとは違っていると思うわ」

「宇田川さん。前にも話したはずよ。

私達は自分たちのレベルに見合っていないステージには立たない、  
と

「それは……」

ううん。聞いていた通りみたいだな。

このままじゃ、R o s e l i a の参加は厳しいかもしだれないな。

「それなら、私達の演奏を聴きに来てください」

どうしようかと、思っていたら突然たえがそんな事言い出した。  
「なんですって……？」

これには流石に友希那も驚いてる。俺も驚いているが……

「ギターは、音楽は、演奏技術がすべてじゃない。

弾きたい人が弾けばいいんです」

「そういう考え方のバンドを否定するつもりはないわ。

ただ、私達とは目指すものが違うというだけ」

…………不味いな。たえの一言で友希那の雰囲気が剣呑なものになってしまった。

流石に、ここまで任せきりにする訳にいかないと想い話には入ろう  
としたら

「ゆ、友希那！まあまあ、落ち着いて。

せつかく頼みに来てくれたんだし、演奏を聴いてあげるくらいいい  
じゃん？ね？」

「…………わかつたわ。ただ、納得できなければ私たちは出演しない。

それだけは肝に銘じておくのね」

「は、は、つーありが、二う、二、一、ますーー

まだ仮だがRosaliaの出演が決

また何んがEcole Seliiaの出演が決まつたようだ

残りのメンバーに事後承諾だし。

他の人達の演奏聞くの  
楽しめたなあー!!

……じゃなくて、そなた達の魂の波動……えーと、たのしみは……」

「しかと見届けさせてもらうわ！」

「」

「い、いや。なんでもないよ」

・・・あこの言葉を聞いた

「力など語るわけがない

となつた。

## 約束の夕影

「やっぱりR o s e l i aは手ごわかつたか・・・」

「でも、きっと出でくれると思います！」

私たちの演奏を聴いてもらつて、きっと・・・！」

そのためにも、練習頑張らなくちゃ！ね、さーや！」

その自信は一体どこから来るのだろうか・・・？」

だけど香澄のポジティブな性格あつてのポピュラんだろうと接してきてわかってきた。

「そうだね。R o s e l i aは保留つてことですけど・・・他のバンド

にも声をかけていかないとですよね」

「うん、沙綾ちゃんの言う通り、スカウトは続けていかないといけないね。

それで今日は、A f t e r g l o wに声をかけてもらおうと2人にな  
来てもらつたんだ」

「彼女たちがいつも使つて いるスタジオがあるみたいだから、まずは  
そこに行つてみてくれるかな？」

もちろん、リン君も一緒にね！」

「あつてみるのが楽しみだね！」

さーや、行こつ！」

そう言うやいなや飛び出していく香澄。

「あつ、香澄！まつたく・・・すみません、ホント。

リンさん私たちも行きましょう」

「ああ、急がないと置いて行かれそうだしな」

某スタジオ

Afterglowが使つてているというスタジオにきたはいいがどうやつて見つければいいんだろうか？

「あふたーぐろう、あふたーぐろう……どこかな～？」

「あれ、そこにあるのつて……」

うん？沙綾が誰かを見つけたみたいだな。

「沙綾？」

「やつぱり！巴だ！」

どうやら沙綾の知り合いらしいが、ここにいるということは彼女もバンドをやつてているのだろうか？

「よ。偶然だな、こんなところで会うなんて」

「二人は知り合い？」

香澄が沙綾に聞くということは香澄は初めて会うのだろう。

「うん。同じ商店街に住んでる、宇田川 巴さん。

私たちと同じ高校1年生だよ。

巴、この子は戸山 香澄。一緒にバンドやつてるだ

「へえ、よろしくな。

こつちはバンドメンバーの蘭にモカ、ひまりにつぐみだ。」「よろしくねっ！」

やつぱり、バンドを組んでいたみた이다。

とりあえず、確認をしてみるか。

「突然で申し訳ないんだが、君たちが組んでるバンドってAfterglowだつたりするかい？」

「あ・・ああ、うん。そうだけど。それが？」

まさか、最初にあつたバンドがお目当てのバンドだとは……

とりあえず、事情を説明しないとな。

「ラツキー！！！

ねえねえ、ライブイベント、出てみないつ!」

「ちよ、香澄！急、急！」

・・・香澄が捲し立てたせいで、タイミングを逃してしまつたな。

前言撤回だな。向こうのほうからアプローチをかけてきてくれた。

卷之三

リ イ ン 説 明 中

「へえ……面白そうだな。みんな、どうする?」

でてみたいなあ。つぐは?」

「私も出たいっ！うん、出よう、出よう！」

あたしも出てみたいし

うん、なかなか感触だな。

「あれ？モ力ちゃんってどつかで見たことがあるような？」

「そ、うそ、う、そ、うぞ！」

いつもうちの店に来てくれてありがとう』

「あ、もしかしてやまふきヘリカリの…」

今度の休みに伺わせてもらうよ」

「ちーやのお家のパンすつゞくおいしんだよ！」

…つと、話がそれにならぬ

それじゃあ、ライブイベントには出でもらえるってことでいいかな？」

「……その人、ええと、リインさんだつけ？」

「うん？ そうだけど――

「リインゼン。それこそ二人も。

最終的には、この達の音を

最終的にはあたし達の音を聞いて判断してほしい。  
いま、ここで弾いて見せるから聞いてて

「お、蘭、かつこいい」と言うねえ。ひゅーひゅー」

確かに、ただ知り合いつてだけじゃなくて、ちゃんと音で判断してほ  
よ。

みんな  
したい

「もういいよー！最高の演奏見せ

「うんっ！」

アラム演奉

「アーティスト、片山

「すゞい、すゞいすゞい！なんか、すつゞいよ！」

香澄、語彙力が・・・

あはは サンキニ

「音楽には洋の日本、アーティストも」

六  
一

「本當ですか！ありがとうございます！」

「それじゃあ、イベントに参加で問題ないかな?」

ふう とりあえすこれで2バンド確保できただ  
「やつたあ！どうどう出演バンドが決まつた！！

みんな、これからよろしくねっ！」

「ああ、よろしく頼むぜ」

「出演バンドが揃つたら、一回みんなで集まりたいと思ってるか

「…らその時にまた連絡するよ」

了解

「ん〜〜つ、なんだか幸先いいね、さーやー・リインさん！  
この調子で他のバンドもドンドン！スカウトしちゃおうつ」